

藤井さん

中村 龍介

今月の十一日、未曾有の大地震が東北地方を襲った。直後、巨大な津波が追い討ちをかけ、海岸地帯の町や村を一呑みにしてしまった。テレビでは目を覆いたくなるような被災地の惨状を赤裸々に報じている。立派な住宅や大型の車、更には漁船までも呑み込んで大暴れする津波、逃げ惑う人々……母親だろうか、お年寄りを背負って高台に走る男性の姿もある。その映像は一瞬私を遠い昔の出来事にタイムスリップさせた。

四十年も前のこと。私はまだ入社三年目、東京本社に転勤して間もないころであった。近郊に出張があり、その帰路、経理の先輩と高速道路を走るタクシ―の後部座席に身を沈め、窓から差し込む夕陽の暖かみを楽しんでいた。

若造の分際でタクシ―を使うことなど許されなかったが、その日は先輩のお供で便乗の幸運に恵まれた。心地よい車の振動と仕事の疲れもあって眠気を催してきた。隣の先輩はとみると、頭を下げて束の間の昼寝を楽しんでいる様子。私は安心感も手伝って一気に睡眠に惹きこまれていった。

『ガッチャーン、ガリ・ガリ・ガリ！』

突然、もの凄い音がして私の身体はシートから投げ出され、気がついたときには前の座席とフロアマットの僅かな隙間に頭をねじ込まれていた。次の瞬間、高速道路から下に車ごと落下していくような幻想に襲われ、思わず両手で何かを握りしめていた。

「お客さん、大丈夫ですか」

アクロバットのように逆さになった、私の足の方から声がかかる。運転手はシートベルトのお陰で難を逃れたようだ。その後のことは殆ど覚ええない。次の記憶は病院のベッドの横に藤井さんが立っていたことから始まる。

直属の課長、藤井さんは恰幅のよい紳士で、年齢は私とは一回り以上離れている。非常にぎっくばらんな方で、社内でも人気が高い。「課長」と役職で呼びかけると拒絶反応を示す。

「課長なんて言うな。藤井さんで十分だ」が口癖でもあった。その藤井さんが何故そこにいるのか、理解できなかった。後には、係長の末永さんの姿もある。

「タクシー会社から電話があったんだよ。今から帰るぞ！」ぶつきらぼうに言うが、その目は優しい。

「此処は何処ですか」

何から訊いていいか分からず、思わず口にする。

「此処は蒲田の救急病院だ。君は右足骨折の疑いだが、自宅療養で大丈夫らしい。ウチまで送っていく」

確かに、右足には大きなギブスがはめられ、ベッド脇には松葉杖が二本置かれている。

「さあ、行くぞ」

藤井さんは後ろを向くと、中腰になってベッドの私の前に背中を差し出した。躊躇する私を急かせて早く乗れと催促。誘われるように肩に手をかけて、大きな背中に身体を預けた。後から末永さんが松葉杖を手に従う。病院の玄関には黒塗りのハイヤーが横付けになり、ドアを開けて待っていた。

藤井さんは定年退職された後、郷里の宇部に帰られ、悠々自適の生活を送っておられた。元氣印が代名詞で、武勇伝や夜の酒豪振りが東京にまで伝わってきた。

昨年、悪性の癌に取り付かれ、余命三ヶ月と診断された。十月にお見舞いしたときはとてもお元氣そうで、氣遣う私に「なるようにしかならんよ」と、悠然たるもの。が、医師の診断は正確で、大晦日に帰らぬ人となった。

被災地の窮状を告げるテレビの映像が、皮肉にも四十年前の藤井さんの背中のぬくもりを思い出させてくれた。

(了)

〔二〇一一年三月記 原稿用紙約四枚、課題「背」〕



